避難所の手伝い、物資の配布… ボランティアを体験して

被災地に入ったボランティアの人たちは、どんな活動をしているのだろう。
宮城県内で実際にボランティアに参加して感じた被災地の様子、人々の表情をお伝えします

「まだ、ありますか……」。物資を求めて息せき切って駆け寄ってくる母娘。「大丈夫、まだたくさん残っていますよ」と答えると、「良かった」と顔をほころばせ列に並ぶ。

ここは宮城県石巻市内の、小さな冷凍加工工場の駐車場。4月2日の午後、ユニクロと緊急支援団体・JENが共同で支援物資の配布を行い、記者はその手伝いにボランティアで参加した。ユニクロは社内のCSR部が社員からボランティアを募り、3月だけで約50人が被災地入り。下着や靴下、アウターなど、段ボール数十箱分を関西の倉庫から調達した。一方のJENは充電機能付きラジオや生理用品、タオルなどの日用品を用意。双方の荷物をトラック2台に詰め込み、午後3時過ぎ、会場となる工場に到着した。

と、すぐに近所の人たちが集まってくる。大急ぎで荷を降ろし、準備にかかったが、普段重い荷物を持ち慣れていないせいか、すぐに二の腕が重くなり、軍手をしていなかった手は段ボールでこすれた。メンズとレディースは配布場所を分けて、袋はきちんと取り去って…。ユニクロ側で唯一の女性、同社CSR部のシェルバ英子さんが現場を仕切り、20分ほどで即席の配布会場をセッティングした。

ジャージ姿で走ってくる親子、そろって自転車で乗りつける夫婦…。1時間たっても人が途切れる気配はない。女性は皆ノーメイク。はだしで靴を履いてきた小学生の女の子もいた。「女性用は奥です！」「Mサイズのインナーこちらです」…。女性用の下着の配布は胸などのサイズを聞く必要もあるためシェルバさんが担当。アウターやスエットも大人気だ。「ありがとう」「どうも、どうも」…配られたビニール袋を物資でいっぱいにし、多くの人がお礼の言葉を口にして帰っていく。

とはいえ、物資の数は限られている。タオルの配布ではやむを得ず「ひとり1枚でお願いします」と説明すると、「家がなくなったのに、タオル1枚しかもらえないんですか…？」と言われ、思わず言葉を失った。女性には生理用品も人気だったが、厚手のものが少なく、「また来週持ってきます」と答えるしかなかった。そのほか、充電機能付きラジオ、がれきや土砂の片付けに必要なゴム長靴と手袋類が飛ぶようになくなった。ようやく人の波が途切れたのは、日が弱まった午後5時30分。予定時間を大幅にオーバーしていた。

物資配布には地元の子どもたちも並んだ

被災地を歩いて話を聞く

「地道」――。まさにこの言葉が、災害支援のボランティアを言い表しているように思う。

乾いた土砂が砂埃となって舞い、時おり異臭も運ばれてくる海沿いの地域。JEN事務局長の木山啓子さんは、被災地を歩き人々の声を直接聞くことから始めていた。住民たちが集まる集会所や物資配布の場所を見つけると、すぐに「今困っていることはありますか」と聞きにいく。地盤沈下で満潮時に道路が水没し、毎日数時間だけ孤立する女川町の流留地区にも出向き、区長たちから「十分な物資がない」などの話を聞いた。

その間、木山さんの携帯電話は、水に浸った民家に新しい畳を運ぶ手配や人員募集に関する連絡で鳴りっ放し。メモ一つ取らずに状況を判断し決定を下していくが、「現場の状況は常に流動的。先を予測するのは本当に難しい」とも話した。

「支援団体です。何かお手伝いできることがあればと、参りました」。4月1日午後、東松島市役所内にある災害対策本部を、JENとともに訪れた。会議室だったと思われる対策本部は、長机に電話とネット回線が引かれ、作業服に長靴姿の男性職員、消防団、航空・陸上自衛隊の隊員が行き来。データ入力や電話応対の業務に就く女性職員の姿もあった。

ここでは地図を広げながら、インフラや家屋の損害、被害者数を把握している行政から話を聞く。JENからは、「この地域で失業した方の数は？」「塩水をかぶった水田は何年で使えるように？」といった質問が。単なる「復旧」ではなく、産業を育てて生活の糧を取り戻し、真に地域を「復興」させることが大切なのだと知った。

災害対策本部を出た後は、「ローラー作戦」に移った。「ローラー作戦」とは、一軒ずつ物資を届けながら、今何が必要かを聞き取り調査していく作業だ。震災から1カ月以上が経過した今、残った家の二階部分などに戻って避難生活を続ける「在宅被災者」と呼ばれる人々が増えている。そこを一軒一軒回るこのような物資の配布をはじめとして、炊き出し、津波が運んだがれきや土砂の除去、足湯や整体マッサージまで、被災地では様々な活動が行われている。2日間という短い間だが、初めて災害ボランティアに参加し、多くの発見があった。

津波と火災に襲われた海沿いの小学校

1.災害対策本部で話を聞く、JEN事務局長の木山啓子さん（手前） 2.避難所の湊小学校で案内をするJENの職員 3.岐阜県から来た25歳の女性は、避難所の床を丁寧に拭いていた 4.湊小学校を慰問演奏で訪れた自衛隊の女性

4

3

2

1

読者の体験（34歳・兵庫県・サービス・事務）

震災後、派遣会社のパソナを通じて未使用のタオルなどを寄附。伊勢谷友介さんのブログで「REBIRTH PROJECT」を知り、紙コップや割りばし、おしぼり、保存食品、サランラップなどを送りました。今は個人的に、未使用の化粧品サンプルを集めて送れないかと考えています

ルポ・災害ボランティアを体験して

ユニクロとJENの物資配布には、開始前から長い列ができた（宮城県石巻市）

のやり方は、「効率は良くないけれど意義は大きい」と、木山さん。多くの支援団体やボランティアが、このローラー作戦を展開している。

手作業に頼る部分はほかにも多い。避難所となっている石巻市立湊（みなと）小学校の体育館や校舎の入り口では、被災者に配る水や食料の入った段ボール箱を、バケツリレーのように並んで運ぶ作業を何度も行った。特に水の入った箱は重かったが、手で運ぶ以外に方法がない。校舎の一階では、岐阜県から参加した25歳の女性が、土砂を運び出した後の廊下を丁寧に拭き掃除。体育館では、同校の卒業生だという母娘が向かい合って野菜を切り、炊き出しを手伝っていた。ステージ上では女性ボランティアを中心に足湯サービスが。こうした触れ合いは、家族を失い傷ついた人の心を癒やす効果もあるという。がれきや土砂の中から、個人の思い出の品を見つけて保存する人。水浸しになった家屋から濡れた畳を一枚ずつ運び出すボランティア。この災害の復興に近道はない、だから自分にできることを一つ一つ手伝っていくしかない――。そう、強く感じた。

ボランティアも助け合う

もう一つ新鮮だったのは、石巻市では支援団体同士の横のつながりが強かったということだ。

夜7時すぎ、石巻市内で活動するボランティアの拠点、石巻専修大学に向かった。5号館の2階で毎日夜7時から開かれていたのが、各NPOと社会福祉協議会が情報共有を行う、「石巻NPO連絡調整会議」だ。

全体会議の後、「炊き出し」「ローラー」、主に医師や看護師による「メディカル」、整体師などの「リラクゼーション・エンタメ」といった班に別かれ、その日の活動報告をし、翌日の計画を話し合う。団体をまたいで情報を共有することで、例えば二つの団体が同じ時間に同じ場所で炊き出しをしてしまう、といった非効率な事態を防げる。参加者はみな笑顔で積極的に発言。所属する団体は違っても、被災地を復興させたいという思いが同じなのだと実感した。

その夜は、会議で出会ったあるボランティア団体の拠点に泊まらせてもらうことになった。被害が軽かった地域の集会所が期間限定で物資配布の拠点となっており、空いた場所に寝かせてもらえるという。屋外で寝ることも覚悟していただけに、心配りがありがたかった。宿泊所では、持参したカセットコンロと水で湯を沸かしコーヒーを淹れてくれる人もいた。水が出ないのでペットボトルの水で歯を磨き、レッグウォーマーとカイロを着けて寝袋で眠った。

翌朝7時からは、その集会所でのミーティング。活動計画のほか、新しく加わった人、立ち去る人の挨拶などが行われた。多くの人が、現地に来るまで見知らぬ同士。こうした場を通じて関係を深めることで、安全に効率的に活動できるのだろう。

さらに驚いたのは、こうしたボランティアを支えてくれる人々もいたということだ。石巻専修大学には、ボランティアのために仙台のラーメン店が〝炊き出し〟に来ていた。電気のない真っ暗な駐車場で、白い湯気が立ち上っている光景が印象的だった。また、宿泊した集会所には、時おり近所の主婦がカレーや味噌汁を作りに来てくれる。自分たちも被災し不自由な思いをしているにもかかわらず、だ。

ボランティアは、現地での衣食住を自分でまかなうことが大前提。けれど、ライフラインが寸断された被災地の状況は厳しい。相手の好意に甘えすぎるのはよくないが、支えてくれる人がいることは、とても心強かった。神戸から来たある女性は、16年前の阪神・淡路大震災の経験から、「今度は自分が」と災害ボランティアの道に入ったと話した。誰かに助けられた経験が、今度は別の人を助ける行為へとつながっていく。

「被災地には物資だけでなく、希望が必要です。ここに住む人々が収入の手段を得て、生活の質を上げていくためのサポートを、10年以上かかるかもしれませんが続けていきたいと思います」（木山さん）

風呂には入れないし、昼食を食べる時間もない。夕方にはカイロが欲しくなるほど、手足の先が冷えた。それでもボランティアたちの顔は明るかった。誰かのために少しでも役に立ちたいという思いが、多くの人々を今日も動かしている。W

5.浸水した民家から畳を運び出すボランティアたち 6.湊小学校の体育館ステージで行われていた足湯サービス 7.「湊小キッチン」と名付けられた、体育館内での炊き出し 8.避難所の壁には「希望」の文字と寄せ書きが

8

7

6

5

読者の体験（33歳・千葉県・商社・一般事務）

震災後には会社に置いてあった靴が役立ちました。計画停電ではソーラー懐中電灯を使い、100円の折りたたみ式ポリタンクで水をストックしました。
会社では、3月の昇給分のお金が義援金として寄付されました。新聞で見た復興チャリティーコンサートにも参加予定です

文・写真／久保田智美